

〈水俣に騙される力〉を取り戻す

水俣病を通じた環境教育の可能性

小松原織香*

はじめに

〈水俣¹〉という場所は不思議な力を持っている。〈水俣〉は「水俣病」と言う病名によって全国に知られるようになった場所である。〈水俣〉では、チッソの工場からメチル水銀を含む汚水が排出され、1950年代には増大していった。その結果、魚介類が汚染され、それを食べた人々が水俣病に罹患した。水俣病は神経疾患であり、重篤な症状の患者は障害に苦しみ、死に到ることもある。また、妊娠中の母親が汚染された魚介類を食べた結果、胎児性水俣病患者が生まれた。熊本県内に限っても、2020年までに、22182人が水俣病の認定申請を行い、1790人が認定された。また、行政補償の一環である医療手帳・水俣病被害者手帳のこれまでの交付総数は、それぞれ7225件、41516件となっている²。しかしながら、今も全く補償を受けていない潜在的な患者は多数いると思われ、約10万人以上が水俣病の影響を受けたとも考えられる。すなわち、公害が起きた当時の〈水俣〉の住民のほとんどが水銀汚染の影響を受けていた。〈水俣〉は、水俣病と切っても切り離せない場所となっているのである。

私は、こうした〈水俣〉という場所に通ううちに、外部からやってくる人たちを、大きく二つに分けることができることに気づいた。第一に、社会問題としての「水俣病」に関心を持つ人たちである。かれらは日本の近代化のなかで、人命よりも経済発展を優先した日本の政策や企業文化に批判的なまなざしを向けている。そして、水俣病の被害者との連帯を求め、加害者を糾弾することを目指す。第二に、石牟礼道子の文学作品を中心とした、〈水俣〉から生まれた文化に惹かれる人たちである。かれらは、水俣病発生以前にあったとされる、人間と海や魚たち、動物、さらには神々との関係に憧れを抱き、〈水俣〉という場所を通してそれらに触れることを目指す。私は前者の関心から〈水俣〉を訪れた研究者であり、後者のアプローチには禁欲的だった。水俣病運動の歴史を紐

*学術振興会特別研究員 PD (関西大学)。

電子メール：<https://orikakom.com> の送信フォームより。

¹ 本稿では、行政区画に基づいた地名ではなく、水俣病が発生した一連の地域のことを〈水俣〉と呼びたい。なお、本文では適宜、読みやすいように山括弧をつけ、引用中の注釈については角括弧をつけた。

² 熊本県(水俣病審査課・水俣病保険課)「水俣病関連統計」2020年8月31日。

とき、水俣病の被害に苦しむ人たちの困難を描き出すことを優先するべく、堅実に実証的な研究を積み重ねようと努めた。それにもかかわらず、水俣の歴史を丹念に見ていくと、後者の不思議で神話的な世界が、深く社会運動に関わっているとしか思えなくなっていた。気がつくとき、私は自分が封じようとしていた文学的な感性を刺激され、スピリチュアルな神話世界へ招き入れられていたのである。そして、これこそが外部からきた人たちが味わう、〈水俣〉という場所で起きる変化の典型例かもしれないと考えるようになった。

では、〈水俣〉という場所には何があるのか。私はこの場所の持つ力を〈キツネに騙される力〉と名付けたい。〈キツネに騙される力〉は、教育学者の朝岡幸彦が環境教育の議論の中で提起した言葉である。朝岡によれば、〈キツネに騙される力〉は、「失われた〈ローカルな知〉の一つの形³」であり、「かつてはふつうに理解できた自然とのつながりやその向こうにいる人びととのつながり⁴」に気づいていく「豊かな感性⁵」である。朝岡は、こうした〈キツネに騙される力〉を取り戻すことを、ESD (Education for Sustainable Development) の取り組みの一環に位置付けようとしている。私は、朝岡の言うところの〈キツネに騙される力〉こそが、〈水俣〉という場所で生まれ、水俣病運動の後景で語り継がれてきた〈ローカルな知〉であったと考えている。そして、〈キツネに騙される力〉を取り戻すことが、環境破壊を防止する取り組みになることを、この論文で提案したい。

論文は以下のように展開する。第1章では、環境保全の取り組みの中に、〈ローカルな知〉を取り入れることの必要性を明らかにする。第2章では、〈キツネに騙される力〉とは、近代化のなかで人々が失っていった生命世界との繋がりにあることを明らかにする。第3章では、主に石牟礼道子に焦点を当て、彼女が自覚的に〈水俣〉の近代化と水俣病の発生というできごとを、まさに〈水俣〉の人々の〈生命世界との繋がりと喪失〉として描いていたことを明らかにする。第4章では、水俣の市民団体「水俣病を語り継ぐ会」による「朗読発表会」を概観し、〈キツネに騙される力〉を取り戻す教育の実践例として取り上げる。最後に、環境教育においては、従来の知識伝達型教育だけではなく、アートを通じた体験型教育によって、感受性を養うようなアプローチを用いることが重要であることを示したい。

³ 朝岡(2016)、115頁。

⁴ 朝岡(2016)、115-116頁。

⁵ 朝岡(2016)、116頁。

第1章 環境保全と〈ローカルな知〉

1962年にレイチェル・カーソン『沈黙の春』が出版されたことを皮切りに、世界的に環境破壊防止の取り組みが始まった。日本でも、1960年代から公害問題が社会的に注目を集めるようになり、1967年に公害対策基本法が公布・施行された。しかしながら、当時の公害対策基本法は、人間の生命や財産への被害を最低限予防する制限を事業者に課すだけであり、経済発展を妨げないことを優先する経済調和条項がおかれていた。そのことへの批判から、1970年の臨時国会（通称「公害国会」）において経済調和条項は削除され、「健康の保護と生活環境の保全」の理念が明確にされた⁶。しかしながら、法学者の大塚直によれば、1970年代後半から1980年代にかけて「環境立法および環境行政は停滞ないし後退の様相⁷」を示した。日本において、企業による大規模な公害への取り組みがなされたあと、都市開発等の生活環境のなかで起きる自然破壊は見過ごされていたのである。それが、1990年代にグローバルな地球環境の保護の取り組みが、国境を超えて広がるようになり、日本でも「持続可能な発展」に注目が集まり、1993年に環境基本法が制定された⁸。この環境基本法について、大塚は「生態系の保護を考慮しつつ、持続可能な環境保全型社会の形成を目指し、国際的な取組の積極的推進を掲げている点で、この法律は環境行政の転換を図るのにふさわしいものといえよう⁹」と評価している。こうした持続可能な環境保全型社会の形成は、国内外を問わず、国際的に目指すべき目標とされるようになった。

しかしながら、近年になり、環境政策が広がるほどに「環境保全とは誰のためのものなのか」という問いが浮上するようになってきている。例えば、地域ガバナンスを研究する笹岡正俊は、インドネシアの事例を紹介している¹⁰。インドネシアでは熱帯林の資源管理をめぐる、巨大企業と自然保護団体との攻防戦が起きている。その一方で、国立公園に指定された地域で暮らすある村の山地民たちは、狩猟を法で禁じられてしまった。しかしながら、その山地民たちにとって猟場は精霊たち（超自然的な存在）の住む場所であり、かれらは伝承された儀礼とともに狩りをしてきた。笹岡は、このような山地民の儀礼を以下のように考察している。

「超自然的強制」に基づく在地の資源管理は、捕獲競争とそれに伴う狩猟圧

⁶ 大塚(2007)、参照。

⁷ 大塚(2007)、14頁。

⁸ 大塚(2007)、14頁。

⁹ 大塚(2007)、20頁。

¹⁰ 以下の事例については笹岡(2019)参照。

の上昇、さらには狩猟資源をめぐる紛争を回避する役割を持っていると考えられた。また、こうした資源管理のあり方は、超自然的な存在が、人びとの行為を監視したり、ルール違反者に制裁を与えたりする（と信じられている）ため、ルールの強制過程で生じかねない住民間の軋轢を回避するはたらきも持っており、「もめごと」を強く忌避するこの地域の社会的文化的文脈に即した一面を持っていると考えられた¹¹。

すなわち、山地民たちは伝承してきた〈ローカルな知〉により、持続可能な環境保全を行っているのである。笹岡は、かれらの〈ローカルな知〉を「民俗知」と呼んでいる。笹岡は、民俗知を以下のように定義する。

民俗知は、多くの場合、特定の土地と結びついた固有性を有し、人びとの生活に根差したものであり、多くの場合、口頭や模倣によって伝えられ、文字で記録されることがあまりない。民俗知は、日々の生活における実践の結果として、生み出され、維持されるものであり、理論的というよりは経験的な知識である。それは決して固定的ではなく、時として失われたり、失われていたものが再発見されたりするなど、ダイナミックに変化するものである¹²。

以上のように定義される民俗知において、重要なのは笹岡が提示した山地民の独自の資源管理の事例のように超自然的な存在が含まれるという点である。山地民たちの暮らす地域における国立公園では、土地の使い方についてかれらが意見を述べる機会はなかった上に、「人びとの超自然観に支えられた資源管理に、公園管理局のスタッフから、どれほど信頼と賛同が寄せられるのかは現状では疑わしい¹³」と笹岡は指摘している。この国立公園の土地利用の手引きでは「動植物保護や生態系保全こそが実現すべき第一義的な価値¹⁴」であるとされ、観光名所として開発が目指されており、山地民の狩猟は考慮されていなかったのである。その結果、山地民たちの狩猟は失われる危機にあり、暮らしを不本意に変えられてしまう可能性がある。笹岡は、このように、土地に根差した暮らしを奪われることから「傷み」が発生し、その傷みは「特定の場所の記憶や情緒的なつながり、特定の資源を利用する中で身体に刻み込まれた価値、『自分たちはこのように生きるのだ』という『生』に対する考え方などと密接に結びついているのであろう¹⁵」と考察している。

¹¹ 笹岡(2019)、95頁。

¹² 笹岡(2019)、78頁。

¹³ 笹岡(2019)、99頁。

¹⁴ 笹岡(2019)、109頁。

¹⁵ 笹岡(2019)、112頁。

さらに、笹岡は、ガバナンスを考える住民を含めた話し合いの場において、民俗知は〈普遍性を備えた知〉に対して不利であることを指摘する¹⁶。ここで笹岡の言う〈普遍性を備えた知〉とは、自然科学や経済学によってもたらされる、動植物の増減やエコリズムによる現金収入の予測、林業の事業再編や農業技術の導入などが挙げられる。それらの言説に対し、山地民の民俗知である、「自分たちはこのように生きるのだ」という「生」に対する考え方などを対置させて、議論の場に参入するのは「困難である¹⁷」と、笹岡は述べている。さらに、笹岡は住民が参加する政策選択の場では「たとえそれがあつた人たちに選択的に便益を提供し、別の人たちに受苦を強いるものであつても、『みんなで話し合つて決めた』ことを理由に、正当性が付与される可能性がある¹⁸」ことも警告している。

以上の笹岡の議論を概括すると、環境保全の政策の進展は、同時に民俗知のような〈ローカルな知〉を周縁化させる側面を持っている。すなわち、より弱い立場に置かれた地域共同体は、より普遍性があるとみなされた、自然科学や経済学の知に圧倒され、それまでの暮らしの放棄を合意させられるという危険にさらされることになる。すなわち、「持続可能な発展」のスローガンを掲げ、経済発展が優先される政策決定のプロセスにおいて、人々の生活環境が不本意な形で奪われ、傷つけられることになる。環境保全の名の下にこのような事態を引き起こすことは、本末転倒と言わざるを得ない。環境保全の倒錯的状况に対抗するために、環境をめぐる議論の中に〈ローカルな知〉を組み込むことが、喫緊の課題として浮上するのである。

第2章 〈キツネに騙される力〉とはなにか

冒頭で述べたように、教育学者の朝岡幸彦は、〈キツネに騙される力〉を、失われた〈ローカルな知〉の一つであると定義した。朝岡は、〈キツネに騙される力〉というアイデアを、内山節の『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』（講談社現代新書、2007年）を基にして構想している。内山は北海道から九州まで、釣り竿を片手に旅をするなかで、日本の各地の人々の語りに耳を傾けた。そして、かれらの語りの中で頻出する、キツネに騙されたエピソードがすべて1965年より前のものであることに気づく。さらに内山は人々に、「なぜ、キツネに騙されなくなったのか」という問いを差し向け、語りを引き出し

¹⁶ 笹岡(2019)、参照。

¹⁷ 笹岡(2019)、113頁。

¹⁸ 笹岡(2019)、113頁。

た¹⁹。その答えを、朝岡は以下の6つに整理している。

日本人は、高度成長期に①「非経済的なものに包まれて自分たちは生命を維持しているという感覚」を失ってしまった、②科学的に説明のつかないことを「迷信」「まやかし」として否定するようになってしまった、③電話とテレビの普及によって自然からの情報を読むという行為が衰退しはじめた、④高校・大学への進学率が上昇して「正解」も「誤り」もなく成立していた「知」が弱体化していった、⑤個人の生と死を自然やそれと結ばれた神仏の世界、村の共同体が包んでいた伝統的な「ジネン」の感覚を失った、⑥日本各地で伐採と植林が行われて「齢を重ねて霊力を身につけた老獺なキツネ」が暮らせなくなった²⁰。

以上の朝岡の整理のように、内山は高度成長期に日本の社会は科学技術や知識を社会の中心に置くようになり、土地に根付いた暮らしや神話世界が内包していた〈ローカルな知〉が散逸していったことを、人々の語りの中から発見した。言い換えれば、〈キツネに騙される力〉は、科学に裏付けされた〈普遍性を備えた知〉の発展とともに、失われていったのである。

さらに内山は、〈キツネに騙される力〉を持つ人々の暮らしには独自の生命観があった可能性を指摘する。自然科学においては、生命は個性を持っている。人間は個人として生まれ、個人として死んでいくのである。内山は、このような個人としての生命観はいつの時代にもあったものであると認める²¹。その上で、「生命とは全体の結びつきのなかで、そのひとつの役割を演じている、という生命観があった²²」と指摘する。内山によれば、日本の伝統社会は「個人としての生命と全体としての生命というふたつの生命観が重なり合って展開してきた²³」のである。内山はこのことを説明するために、木と森の関係を例示する。個別の木は、それぞれ芽吹き、育ち、枯れていくというプロセスを持ち、個性を持っている。それと同時に、森は周辺の木からの影響を受けており、ほかの木が伐採されてしまえば、生命を維持することが難しくなる。すなわち「森という全体的な生命世界と一体になっていてこそ、一本一本の木という個体的生命も存在できるのである²⁴」と内山は解説する。その上で、内山は生命世界の中で生きる人間を次のように描き出す。

¹⁹ 内山(2007)、参照。

²⁰ 朝岡(2016)、113頁。

²¹ 内山(2007)、参照。

²² 内山(2007)、110頁。

²³ 内山(2007)、110頁。

²⁴ 内山(2007)、111頁。

伝統社会においては人間もまた、一面ではこの世界のなかにいた。人間は個人として生まれ個人として死ぬにもかかわらず、村という自然と人間の世界全体と結ばれた生命として誕生し、そのような生命として死を迎える。人間は結び合った生命世界のなかにいる、それと切り離すことのできない個体であった。²⁵

以上の内山の考察をもとにすれば、〈キツネに騙される力〉を持つ人々とは、〈個体としての生命である私〉と〈生命世界の一部である私〉の二重性を生きていることになる。片方の〈私〉は、人間の共同体の中で生産活動に取り組み、生活をしている。同時に、もう片方の〈私〉は、より大きな生命世界に取り囲まれ、生かされている。私は、その〈生かされている私〉がクローズアップされる経験こそが、キツネに騙されることであると考えたい。人間は、超自然的な力を持つキツネにはかなわず、騙され、いいようにされてしまう。その受動的経験は、人間の無力さを味わわされる体験であるとともに、生命世界に包まれている豊かさを知覚する契機になっているのではないか。この解釈をもとにして、私は、〈キツネに騙される力〉を、自然の全体性をこの身に感じ取るための感受性(sensitivity)であると再定義したい。すなわち、〈キツネに騙される力〉とは、世界を把持するための「もうひとつの方法(alternative way)」なのである。これは、自然科学や経済学が人間以外の存在を対象化する時に〈資源としての自然〉として扱おうとするのとは、全く異なる方法である。

ここで強調しておきたいことは、私の言う〈キツネに騙される力〉は、あくまでも受動的経験に重きを置いたものだということである。自分からキツネに騙されに行くことはできない。キツネが自分を騙しに来てくれて、初めてそれを経験できるのである。すなわち、〈ローカルな知〉は、従来の能動的な学習とは異なる方法で学ぶ必要がある。統計的にキツネに騙されたエピソードの分布を明らかにしたり、キツネの民話のモデルを作ったりしたところで、キツネは私たちのもとに騙しに来てくれないだろう。〈ローカルな知〉の習得のためには自然科学や社会科学のアプローチではなく、人文学のアプローチが必要である。丁寧に土地の歴史を紐とき、そこで語られている民話に耳を傾け、土地に根付いた思想を読み解いていくなかで、〈キツネに騙される力〉は発見されていく。私たちは、キツネが騙しに来てくれるための土壌を再生させるために、〈ローカルな知〉を求める。これが私の考える〈キツネに騙される力〉を取り戻す環境教育である。

同時に、私はこのような環境教育のなかで、〈普遍性を備えた知〉を否定する

²⁵ 内山(2007)、111頁。

必要もないと考えている。なぜならば、科学技術の発展を願い、より快適で便利な近代的な生活を求めていくのは、〈生活者の力〉でもあるからである。先に内山の論をもとに、人間には〈個体としての生命である私〉と〈生命世界の一部である私〉という二重性があると述べた。前者の欲望として、物質的・経済的な豊かさを求める生活者の欲望、特にその土地に住む人たちの希求を退けることはできない。その〈生活者の力〉を認めながらも、〈キツネに騙される力〉を拮抗させていくことこそが必要であると私は考えている。環境教育が利便性や経済発展の否定になり、懐古主義や若い世代（特に子どもたち）への説教になってしまえば、生き生きとした生命世界との繋がりや、たちまち味気のない「絵に書いた餅」になってしまうだろう。そうではなく、生き生きとした生命世界との繋がりに魅了されるからこそ、〈キツネに騙される力〉が習得され、利便性や経済発展一辺倒の世界の見方への疑問が生じなければならない。このプロセスを、どうすれば導くことができるのか。これが〈キツネに騙される力〉を取り戻すことを目指す環境教育の課題である。

私は、そのためには最もドラスティックに〈キツネに騙される力〉が奪われる事件、すなわち環境破壊の具体例を取り上げることが提案したい。内山ならびに朝岡は、〈キツネに騙される力〉が失われていくプロセスの背景に、一般的な日本における近代化と産業発展があるとし、徐々に人々がその力を失っていくことを想定していた。他方、環境破壊においては、暴力的に土地に住む人々の暮らしが破壊され、そこに住むキツネたちも殺されてしまう。そのような過酷な状況のなかで、人々が生命世界との繋がりを破壊されていくプロセスを見つめた上で、失われた〈キツネに騙される力〉を取り戻す可能性を探求するのである。そのことにより、〈キツネに騙される力〉を取り戻すような環境教育の必要性と、ありうる実践例がより明確になると、私は考えている。よって、次の章では〈水俣〉という場所における、キツネをめぐる話を取り上げたい。

第3章 〈水俣〉のキツネたち

〈水俣〉でも、キツネに騙された話はいくつも残っている。1997年に刊行された『新水俣市史』民俗・人物編には〈水俣〉のキツネのエピソードがいくつも収録されている。たとえば、久木野の「おさん狐」に騙された話が出てくる。また、茂道に住む金子カメは、大漁となった鰯を近隣地区に売りに行く道すがら灰色のキツネに出会い、「よかあきないば、させっくれんな²⁶」と鰯をわけてやると、その日の商売は大繁盛であった。そのことを金子は「出がけに、狐に

²⁶ 水俣市史編さん委員会編（1997）、847頁。

鱒ば、かませたでじゃいよ知らんばってん²⁷」と語っている。さらに詳しい記録としては、岡本達明らの水俣の人々に対する聞き書き²⁸があり、6つのキツネに関するエピソードが収録されている。明治27年(1894年)生まれの荒木ツルは、キツネの子どもと遊んだ思い出に触れ、「狐の子は、犬の子みたいじゃもんな。暖かい日は、石の上に日向ぼっこして、子供たちと遊びよったたい²⁹」と語っている。荒木にとって、キツネと人間の生活圏内はほとんど重なっている。同じく明治27年(1894年)生まれの今村清一は、自分はキツネには騙されないと豪語する男性が、旅の道中で声をかけられ、湯に浸かりながら芝居に見ているつもりだったが、実際には畑で肥料の人糞をためる野壺に座っていたというエピソードを語っている³⁰。この男性はもちろん、キツネに騙されたのである。さらに、明治24年(1891年)生まれの中村藤之吉は、キツネが化けて出てくることを次のように語っている。

化ければ、あーた、手も足も人間と変わらんようにして歩くとですでな。後ろ足で立ってな。しっぽだけは、よう隠れんそうです。でも神通というのを持っとりますもんやっで、しっぽが出とつても人間にや分からんとですたい。人を騙すときゃ、背中に乗って腰に足を踏み掛けて、目の前に手を組むそうですもんな。それで世間の方角も分からんようになつとたい。魂の多い(利口な)人間は、すぐ腰を探って見ますげなたい³¹。

以上のように、〈水俣〉の人々もまた、キツネたちと共に暮らし、〈キツネに騙される力〉を十分に身に備えていた。

かれらのような〈水俣〉の人々が生命世界との繋がりを持っていたことに自覚的であり、書き記そうとしたのが、作家の石牟礼道子である。その代表例として、1976年に発表された「椿の梅の記」を取り上げたい。この作品では、幼少期の石牟礼こと「みっちゃん」の目を通して、水俣病発生前の〈水俣〉が、神話世界と入り混じりながら描き出されている。冒頭で、みっちゃんは祖母(おもかさま)から、「山に成るもの、山のあのひとたちのもんじゃけん。もらいにいたても、慾々とこさぎ取ってしもう(あとも残らぬようとしてしまう)てはな

²⁷ 水俣市史編さん委員会編(1997)、847頁。

²⁸ 聞き書きとは、日本の民衆の言葉をできるだけ忠実に書き起こした独自のインタビューの手法である。筑豊の炭鉱を中心に、鉱夫の聞き書きを行った「サークル村」の活動が有名である。岡本らは、1971年から〈水俣〉での聞き書きに着手し、20年かけて書き起こし・編集を行い1990年に『聞き書水俣民衆史』を刊行した。また、この文献では、読みやすさを優先して方言が標準語に近い書き方に変更されている(岡本・松崎、1990年、参照)。

²⁹ 岡本・松崎(1990)、233頁。

³⁰ 岡本・松崎(1990)、参照。

³¹ 岡本・松崎(1990)、237-238頁。

らん。カラス女の、兎女の、狐女のちゅうひとたちのもんじゃるけん、ひかえて、もうろて来³²」と囁かれる。すなわち、みっちんの住む世界では、山の恵はカラスやウサギ、キツネたちと分け合わねばならないのである。みっちは、まさに人間以外の存在がうごめく生命世界の一部として生きているのである。

同時に、みっちは、〈生命世界の一部である私〉だけではなく〈個体として生きる私〉であるという、人間の二重性に引き裂かれる子どもでもある。言葉を持たない赤ん坊から成長していくうちに、生命がうごめく世界から切り離されることに悲哀を感じている。石牟礼は次のように書く。

人の言葉を幾重につないだところで、人間同士の言葉でしかないという最初の認識が来た。草木やけものたちにはそれはおそらく通じない。無花果の実が熟れて地に落ちるさえ、熟しかたに微妙なちがいがあのように、あの深い未文化の世界と呼吸しあつたまんま、しつらえられた時間の緯度をすこしずつふみはずし、人間はたったひとりでこの世に生まれ落ちて来て、大人になるほどに泣いたり舞うたりする。そのようなものたちをつくり出してくる生命界のみなもとを思っただけでも、言葉でこの世をあらわすことは、千年たっても万年たっても出来そうになかった³³。

この悲哀から、みっちは懸命に生命世界の一部となろうと試みる。それは自分という存在がどこからきて、どこへいくのかがわからないまま、生命の根源を求めて彷徨う、孤独な子どもの必死のあがきである。みっちんにとって「草とか水とか、麦とか雪とかになり替ってみることは、むしろ安息でもあ³⁴」り、別の生命を演じようとしていた。石牟礼は次のように書く。

存在というものの意味は、感覚の過剰なだけの童女だからというだけでなく、理屈をもっては解きがたかった。いっそ目の前に来たものたちの内部に這入って、なり替わってみる方がしっくりとした。いのちが通うということは、相手が草木や魚やけものならば、いつでもありうるのだった。とはいえ、ありとあらゆるものに化身できるわけではなく、そこにはおのずからなる好き嫌いがうごいていて、魚とか猫とかもぐらとか、おけらや蟻や牛や馬、象ぐらいならばなり替わってみることができるのである³⁵。

以上のように石牟礼が、みっちんの目を通して語ることは、〈生命世界の一部で

³² 石牟礼(2015)、12-13頁。

³³ 石牟礼(2015)、162-163頁。

³⁴ 石牟礼(2015)、165頁。

³⁵ 石牟礼(2015)、166頁。

ある私)であろうとするがゆえに、それらの存在を演じてみることである。そして、かれらになり替わることで、自分と生命世界との繋がりを確認しようとしているのである。

みっちゃんの変身体験が、もっとも象徴的に描かれているのが、「椿の海の記」の第7章「大廻りの塘(うまわりのとも)」での一場面である³⁶。大廻りの塘は、ススキに囲まれた波打ち際である。ここは、〈水俣〉の土俗の神々やその眷属である山童や川太郎たち、さらに船霊たちの通り道になっている。また、かれらがない間は、ガゴと呼ばれる妖怪たちが戦をして大騒動になっていた。みっちゃんは、秋の昼下がり、この大廻りの塘にきて、白狐の仔に変身する。

わたしは白い狐の仔になっていて、かがみこんでいる茱萸の実の下から両の掌を、胸の前に丸くこごめて「こん」と啼いてみて、道の真ん中に飛んで来る。首をかたむけてじっときけば、さやさやとかすかに芒のうねる音と、その下の石垣の根元に、さざ波の寄せる音がする。こん、こん、こん、とわたしは足に乱れる野菊の香に誘われてかがみこむ。晩になると、大廻りの塘を狐の嫁入りの提灯の灯が、いくつもいくつも並んで通るのだと、婆さまたちから聞いていた。わたしは、耀っているちいさな野菊を千切っては、頭にふりかけ、また千切っては頭にふりかけてみる。自分がちゃんと白狐の仔になっているかどうか。それから更に人間の子に化身しているかどうか³⁷。

以上のように、みっちゃんは大廻りの塘で、キツネに変身してそこを一人で歩いている。さらに、そこで「葛の葉」という、安倍晴明の母である白狐が、息子の顔をみようとする人間世界へやってくる母子物語の幻想を見る。みっちゃんは、人間に化けるキツネを通して、人間とそれ以外の生命たちとの地続きの世界に浸るのである。石牟礼は、このような大廻りの塘での、神々や妖怪との交流は、〈水俣〉の人々にはありふれたものであったと書いている。

大廻りの塘の一带はこの地の土俗神やその眷属たちが、ことに好んで集まる場所だった。村老たちはそれぞれに、愛すべき多彩な神々との、出遭いの体験を持っていて語ったし、誰もが知っている共通の話があったけれど、自

³⁶ この「大廻りの塘」に着目するきっかけをくれたのは、笹川貴吏子氏(立教大学大学院博士後期課程)であったことを付記したい。私は、初めて大廻りの塘を訪問した時、チツソの廃棄したカーバイドのことで頭がいっぱいであった。そのとき、笹川氏が、ここが、「椿の梅の記」の中で、みっちゃんがキツネに変身していた場所であることを指摘してくれた。私はその指摘によって、水俣の人々にとって異世界との狭間であったことに気づいたのである。私自身が、〈水俣〉でのこうした人々の交流の中で〈キツネに騙される力〉を取り戻して来たと感じている。

³⁷ 石牟礼(2015)、130頁。

分だけが出遭ったというとおきの話を、ひとりひとりが持っていた。誰もが知っている話であっても、解釈の仕方は微妙にちがっていて、それは話し手たちの芸のごときものでもあった。神々たちや山童や、川太郎や、ガゴやゆうれいやの話になると、どんなちいさな部落にでも、ちいさいなりに異説があって、多々良のタゼやもたんのモゼ級のいくさの話でも、いくさ以上に、話し手たちの気宇が大廻りの塘をめぐって賑わっていたのである³⁸。

以上のように、石牟礼によれば大廻りの塘は、人間の日常の世界と、それを超越した神々や妖怪たちの世界の境目になっている。〈水俣〉の人々はこうした場所を通して、人間以外の生命の世界との繋がりを知覚していたと考えられる。ここは〈キツネに騙される力〉を育む場所でもあったはずである。ところが、この大廻りの塘は、チッソの工場ができたことにより、廃材の投棄場所になってしまった。石牟礼はこのことを「この塘一帯はいま、チッソの八幡プールの残渣の下に生き埋めのまま、神々とともにあったひとびとの壮大な魂の世界は水銀漬となり、わたしの村の目前にある³⁹」と記述している。すなわち、チッソの水銀汚染は、水俣病を発生させただけでなく、〈水俣〉の人々が生命世界と繋がるための場所を破壊したのである。結果として、環境破壊が〈水俣〉のキツネたちを追い出してしまった。

さらに、水俣病以降に、超自然的な力を持つキツネたちがいなくなったことを、石牟礼は『苦海浄土』第二部「神々の村」で詩的に描写している。第二部は、1970年のチッソ株主総会へ、水俣病患者やその家族、支援者が押しかけ、チッソの社長と対面して自分たちの苦境を訴える「一株運動」が主に描かれている⁴⁰。そのなかで、水俣病の被害者の女性たちが「しゅり神山」について語り合う場面がある。しゅり神山とは、〈水俣〉にあるキツネたちの住処であり、キツネの神様である「おしゅらさま」がいると考えられている。石牟礼の作品のなかで、女性たちは、「誰も[おしゅらさまを]詣らんごつなって粗末にしてから、水俣病まで出て来たわたしは想うとります⁴¹」「おしゅらさまば、わたしは信仰しとる⁴²」と話している。おしゅらさまは、地元の人たちにとって大事な神様なのである。しかしながらチッソが山を打ち崩してしまったので、近くの御所浦島へ逃げていった。石牟礼はそのキツネたちが島へ船で渡っていく様子を「人間の姿になって来て事情をのべ、本物の銭を持ってきたのもいたし、狐の姿のまま、舳のところに遠慮ぶかげに腰かけているので、それとわかつたり

³⁸ 石牟礼(2015)、136-137頁。

³⁹ 石牟礼(2015)、137頁。

⁴⁰ 一株運動については小松原(2019)が詳しい。

⁴¹ 石牟礼(2004)、603頁。

⁴² 石牟礼(2004)、604頁。

した⁴³」と書いている。さらに、石牟礼は、〈水俣〉の女性たちは山を追われたキツネたちを哀れに思いながら、チッソの社長も「魂の高かお人なら、しゅり神山のおしゅらさまのことは、お解りになりそうなものでございますよねえ。くらいの高か狐ですがねえ⁴⁴」と語ったと記述している。ここでは、〈水俣〉の女性たちが、〈キツネたちや神様が住む世界〉を〈人間の世界〉となめらかな繋がりのあるものとして捉えている様子が描かれている。さらに、その女性たちが、チッソの社長が「魂の高かお人」、つまり立派な人であれば生き生きとした生命世界との繋がりを共有できると考えていることである。しかしながら、株主総会に出席したチッソの社長は、〈水俣〉の女性たちの生命観を共有する感受性は全くなく、かれらの訴えを正面から受け止めることもできなかった。そして、水俣病患者とその家族の必死の訴えもむなしく、一方的に株主総会は打ち切られてしまった。

石牟礼は、さらにその翌日に、水俣病患者とその家族が高野山に登ったとき的一幕を描いている。石牟礼は、一人の女性の語りを次のように書いている。

あのですね、昨夜、夢見ましてねえ。蝶々がですね、舟ば連れて、後さきになってゆきよるのでございます、花びらのようでもありました。光風で、おしゅら狐が漕いでゆきよりましたがなあ。影絵でしたけど……。明神の岬から、しゅり神山のあの、おしゅらさまでした。どこにゆくつもりでしたるか⁴⁵。

ここで描かれているのは、しゅり神山のおしゅらさまの出奔である。おしゅらさまは、チッソに山を破壊され、水銀に汚染されて住めなくなった〈水俣〉から、舟にのってどこか遠くへ行ってしまふ。それを先導しているのが蝶々であるが、このあとの語りで女性は、蝶々は水俣病で亡くなった自分の娘であるともつぶやいている⁴⁶。言い換えれば、おしゅらさまは死者たちを連れて、この世の〈水俣〉から立ち去ってしまったのである。ここで〈水俣〉の人々が奪われたのは、健康や美しい自然風景だけではなく、神話的な生命世界との繋がりでもあったことを、石牟礼は鋭く描き出している。これらの喪失は、自然科学や経済学の知識では計測ができない。何が破壊され、何が奪われたのかを理解するためには、それらの生命世界を知覚する感受性が必要である。すなわち、生命世界との繋がり喪失は、〈キツネに騙される力〉を持つ者だけが理解できる、環境破壊の害なのである。

⁴³ 石牟礼(2004)、604頁。

⁴⁴ 石牟礼(2004)、605頁。

⁴⁵ 石牟礼(2004)、606頁。

⁴⁶ 石牟礼(2004)、参照。

逆方向から考えれば、〈水俣〉の人々の喪失を理解しようと努めることこそが、〈キツネに騙される力〉を取り戻すプロセスになり得るのではないだろうか。現代社会を生きる、私も含めた多くの人々は、〈キツネに騙される力〉を失っているし、もしそれを取り戻そうとしても、知識や情報を習得し、プラスアルファの能力として得ようとしがちである⁴⁷。しかしながら、私たちは、すでに去ってしまったキツネたちの足跡をたどるところから始まるべきではないか。つまり、私たちがキツネたちを殺し、神様を追い出してきた歴史、つまり正史には残らない、〈キツネに騙される力〉を持っていた人々が語り継いできた、キツネたちの物語に耳を傾けるのである。私は、水俣病の歴史を〈生命世界との繋がり喪失の物語〉として学ぶことで、私たちは〈キツネに騙される力〉を取り戻すことができると提案したい。

第4章 〈キツネに騙される力〉を取り戻す実践例：朗読活動の可能性

それでは、私たちはどのように〈キツネに騙される力〉を取り戻すことができるのだろうか。その具体的な実践例として、「水俣病を語り継ぐ会」の朗読活動を取り上げたい。「水俣病を語り継ぐ会」は2012年に発足し、2013年に吉永理巳子が代表となって正式に設立された団体である。吉永は1951年に水俣の明神で生まれた⁴⁸。漁師であった父親は1954年に急性劇症型水俣病で亡くなっている。祖父は1948年に水俣病を発症し、9年間の闘病生活を送り、1956年に亡くなった⁴⁹。吉永は幼少期から家族が水俣病であることを言えずに生きてきた。思春期になってボーイフレンドができて、一番の悩みである水俣病の話をして口にはできないため、関係が深まらない。周囲に心を許せずに生きてきた。しかしながら、1994年ごろに色川大吉編『水俣の啓示』（上下、筑摩書房、1983年）を読んだことが、吉永の人生の大きな転機になった。吉永は、「それ [『水俣の啓示』] を見たときにですね、我が家だけの問題じゃないなっていうことに、やっと気づいたんですよ。父たちや祖父たちだけの病気じゃないっていうことに気づいたら、『もっと知りたい』っていう思いになってきたですよ⁵⁰」と語る。それ以降、吉永は水俣病運動に参加し、水俣病差別の問題に取り組むようになった。さらに、1997年から吉永は水俣市立水俣病資料館で「語り部」として来館者に向けて自らの経験を語っている。この吉永が、語り部活動と並行しながら

⁴⁷ これについては、朝岡(2016)におけるスピヴァクの learn と unlearn の発想を用いた、「学び捨てる」教育のアイデアに示唆を受けた。

⁴⁸ NHK の戦争証言アーカイブスにおいて、2013年に収録された動画で吉永の語りを視聴することができる (NHK 戦争証言アーカイブス, 2013)。以下の吉永の語りはその動画を参照した。

⁴⁹ 水俣病資料館「吉永理巳子さん」(掲載日不明)

⁵⁰ NHK 戦争証言アーカイブス(2013)。

ら立ち上げたのが「水俣病を語り継ぐ会」である。同会の活動は、「水俣病資料館展示解説員養成講座、水俣病患者らの聞書集の編集・発行、熊本県内の教職員や保護者を対象とする水俣病啓発事業等多岐にわた⁵¹」っている。そのなかで、2015年ごろから始まったのが朗読活動である。

「水俣病を語り継ぐ会」の朗読活動では、有志が集まり、月に一度の朗読講座でそれぞれが持ち寄ったテキストを読む練習を行う。また、毎年2月に「早春の朗読発表会」を行っている⁵²。私も、2018年2月18日に水俣病情報センターで開催された、第2回「早春の朗読発表会」に観客として参加した。朗読活動の様子を明らかにするために、当日の朝日新聞の記事と私の記憶をもとにその情景をスケッチしておきたい。水俣病情報センターは、国立水俣病研究センターのなかにあり、一面ガラス張りの窓からは〈水俣〉の海が見える。この日は晴天であり、明るい陽の光が差す早春の青海が見えていた。この年は2月10日に石牟礼道子が亡くなっており、その直後の開催となった。吉永は石牟礼とも交流があり、石牟礼から朗読活動について「続けることが大事⁵³」と励まされたと言う。さらに吉永は、当日の開会の挨拶で「今日の海はきらきら輝く『光風（ひかりなぎ）』。早春の野山や海を誰よりもいつくしんだ大切な方を亡くし、まだ受け止めきれない⁵⁴」と語った。その吉永の挨拶の言葉の重みもあり、会場は追悼の厳粛な雰囲気にも包まれていた。加えて、吉永は夫の利夫とともに、『魂の秘境から』（朝日新聞出版、2018年）に収録された、石牟礼のエッセイ「アコウの蟹の子」を朗読した。エッセイの中には石牟礼道子を見舞いにきた吉永夫妻も登場する。二人は青いポリバケツに近所の海辺で捕まえた蟹の子を入れて持ってきたのである。その場面の一部を以下に引用してみよう。

二人はもどかしそうにポリバケツの中を指しながら、かわるがわる声をかけた。

「ほら、やっと着いたぞ。出て来て道子さんに挨拶せんか」

夫の方がそう言って、石の脇腹をくすぐるようにすると、石の下から小さな蟹の子がちょろちょろと出て来た。ちっちゃな鋏もちゃんとしていて、大人が三人で覗きこんでいるのに脅えて、二本の鋏を振り立てながら逃げ廻る様子が、いかにもいじらしく愛しかった。

蟹の子はよっぽどおどろいたらしく、奥さんの腕を伝ってたちまち肩に上ったところを、わたくしがつかまえた。蟹の子はわたくしの掌の中でもぞもぞ動いていたが、両手の親指の合わせ目からバケツの中に落ちこちてしま

⁵¹ 川尻(2021)、40頁。

⁵² 残念ながら、2020年、2021年はCOVID19の影響により中止された。

⁵³ 朝日新聞(2018)。

⁵⁴ 朝日新聞(2018)。

った。わたくしはその潮水に手を突っこんで、掌の中で蟹の子を遊ばせるのに夢中になった。なんとかつかまえたかった⁵⁵。

以上のように石牟礼の目を通して、〈水俣〉の海の小さな生き物たちの生き生きとした姿が描写されている。吉永は、蟹の子たちと人間が出会い、同じ世界で生きていることを描き出すような、石牟礼の言葉を朗読した。

もうひとつ、この年の朗読発表会で異彩を放ったのが二人の女性の参加者による、絵本『みなまた 海のこえ』（文・石牟礼道子、絵・丸木俊、丸木位里、小峰書店、1982年）の朗読である。「しゅうりりえんえん」という謎の呪文のような声からはじまり、「きつねのおぎん」が水俣に起きた公害をキツネの視点から語る。そこで表現されるのは、水俣で起きた近代化のなかで、人間だけではなく多くの生き物たち、ガゴなどの妖怪たちが苦しみ、亡くなり、この世から去っていく物語である。その一部を以下で引用してみよう。

しゅうりりぎんぎん すすきがゆれる
ゆけどもゆけども すすきがゆれる
すすきと思えば 白さぎ鳥
それもまぼろし なあーんもみえん
なあーんもみえん
いまは だろだろへドロの底
生きたまんまで うめられた⁵⁶

以上の一節を見てわかるように、キツネが語る言葉は音読して初めて生き生きと伝わってくる。朗読では不思議な呪文のような言葉が繰り返され、女性たちの声が重なり合って響きあい、幻想的な世界が表出されていた。このような水俣の物言わぬ小さな生き物たちや神話の世界が、朗読の力によって観客の目の前に出現しようとしていた。小規模な市民活動ではあるが、独自の表現世界を確立しようとしていたと言えるだろう。朗読発表ではまさに、公害によって奪われた〈水俣〉の〈生命世界との繋がりと喪失〉が表現されていたのである。これこそが、〈キツネに騙される力〉を取り戻そうとする実践の一つであると、私は考えたい。

では、なぜ、そのような表現活動が可能になっているのだろうか。「水俣病を語り継ぐ会」の朗読活動については、環境教育を研究する川尻剛士が調査を行い、参加者へインタビューを行なっている。そこでは、水俣病を経験したこと

⁵⁵ 石牟礼(2018)、51-52頁。

⁵⁶ 石牟礼・丸木・丸木(1982)、24頁。

のない、すなわち「非体験者」が水俣病に関するテキストを朗読することについて、参加者が自らの思いを語っている。川尻の調査報告に記録された、参加者の一人である大津円の経験には、朗読活動の非常に重要な一面が現れている。大津は朗読のテキストとして、水俣病患者の杉本栄子の「祈りの言葉」を取り上げた。杉本は両親を水俣病で亡くし、夫も自分も水俣病を発症し、周囲からの差別と貧困で苦しみながら生きてきた。そのなかで杉本は、水俣病で犠牲になったのは人間だけではなく、魚や鳥たち、海などの人間以外の存在でもあることを指摘し、供養をしようと呼びかけた。特に1994年の火のまつりで読み上げられた杉本の「祈りの言葉」は、魚になりかわって水俣病の苦しみを訴えながらも、〈水俣〉のこれからの未来について希望を持って語っているテキストである。杉本はまさに、〈水俣〉の〈生命世界との繋がりと喪失〉を言語化してきた水俣病患者でもある⁵⁷。川尻によれば、大津は杉本の「祈りの言葉」を読むことになったが、「『でも、まだ栄子さんの言葉が私のなかに入ってきていない』としきりに語りつつ苦悶していた⁵⁸」という。しかしながら、川尻によれば大津の様子は時間を経て変わっていく。川尻は以下のように述べている。

しかし、その3ヶ月後に再び筆者が大津さんを訪ねて、「この前のイベントの朗読はどうでしたか」と尋ねると、大津さんの表情は少しやわらかさがあった。いわく、「読むまでの体験がすごく大事だとわかった」ということだった。大津さんは、イベントの当日までの約1ヶ月の間に確信を持って杉本さんの語りを読むことができるように、埋立地に程近い場所で育った吉永さんとともに埋立地を丁寧に歩いてみたり、杉本さんの生前の映像を視聴したり、埋立地に思いを寄せる方にお会いしたり……、という様々な体験を繰り返して、杉本さんの生きた世界へと少しでも「近づく」ことを模索したのだという。それは非体験者が伝えていく上で、その基礎として必要でありながらも絶対的に不足している体験をなんとか埋め合わせようとする過程であっただろう。大津さんの表情の移ろいは、杉本さんの生きた世界にふれられたことを物語っていたのだと思う⁵⁹。

以上の川尻の記述のように、大津は朗読をするために、「体験」を積み重ねている。つまり、テキストを読んでその言葉を頭で理解するのではなく、実際に杉本が生きていた世界に近づこうと、ゆかりのある人たちと出会い、埋立地を歩き、身体を通して理解していったのである。この体験を経るこそが、自らの声

⁵⁷ 杉本の「祈りの言葉」については、小松原(2016)で詳しく述べた。

⁵⁸ 川尻(2021)、40頁。

⁵⁹ 川尻(2021)、41頁。

で杉本の「祈りの言葉」を表現するために必要なステップだったのである。

ここで私は大津の朗読活動における経験を踏まえて、4点について述べたい。第一に、大津は杉本の言葉を、自らの延長線上ではなく、隔絶した〈他者の言葉〉として受け取っていることである。大津は、水俣病患者に共感したり、同情したりすることを、朗読活動のベースにはしていない。また、水俣病患者の置かれた状況について怒っているわけでもない。あくまでも他者の、自分の外側にある言葉を、「なかに入れる」と表現している。この〈他者の言葉を語る〉ことが、朗読活動の特異な点である。これまでも〈水俣〉では、水俣病患者や水俣出身者が〈当事者として語る〉ことは水俣病運動の中で推奨されてきた。〈水俣〉だけではなく、障害や病気を持つ人、セクシュアル・マイノリティ、民族マイノリティほか、〈当事者として語る〉ことは社会運動では頻繁に行われている。それに対して、朗読は他人の書いたテキストを読むため〈他者として語る〉ことがスタート地点となる。だからこそ、他人の言葉を飲み込むためのプロセスが必要となる。

第二に、その〈他人の言葉を飲み込むためのプロセス〉は、朗読活動における水俣病の学び方であると捉えることができるだろう。これは〈水俣〉における〈生命世界との繋がり喪失〉を表現する力を身につけていくプロセスでもある。さらに、これこそが〈キツネに騙される力〉を取り戻す方法の一つではないか。このとき、重要なのは、学び方の中心となるのは、「情報を得ること」「考えること」「議論すること」などの言語を使った知的活動ではないことである。つまり、この学び方においては、「より多くの水俣病の知識を得ること」や「環境問題に対する責任の取り方を考えること」や「お互いの価値観を議論で付き合わせることは重要ではない。そうではなくて、水俣の地を歩き、そこで生きてきた人たちの声に耳を傾け、もういなくなってしまった死者の存在に近づこうとすることで、私たちは〈キツネに騙される力〉を取り戻すことができる。このプロセスは、〈学習〉よりも〈稽古〉という言葉を使うほうが、内実を表すのに的確だと思われる。新しい能力を身につけるのではなく、失われたものを見ようとし、沈黙して自己を殺していくこと。それは、他者に自分を譲り渡す経験と言ってもいい。〈私の言葉〉ではなく〈他者の言葉〉を受け取り、身体を通して自分の声によって表現することが朗読である。その意味では、自己放棄と他者受容が〈キツネに騙される力〉を取り戻す鍵になると言える。

第三に、朗読活動の目的は水俣病の教訓を伝えることではないだろう。人類は水俣病の歴史を学ぶことで、近代化の負の側面や科学技術の限界に気づき、「私たちはどう生きるべきか」を再考させる力を持っているが、朗読活動はそうした「教訓」を導き出すことが第一義にはならない。なぜならば、水俣の〈生命世界との繋がり喪失〉は、もう起きてしまい、取り返しがつかないからで

ある。海は埋め立てられ、キツネたちは死んでいき、神様たちはいなくなってしまう。その再生の道は、果たして人間に可能なのかもわからない。一度破壊してしまった神話世界を、人間の力によって再構築できるものなのかも不明である。いくら失われたものたちを憂いても、戻って来させる力を人間が持っているのかわからない。その無力感を共有することこそが、〈キツネに騙される力〉を取り戻すための稽古になると私は考えたい。人間には、神話世界の再生の権限も力もないにもかかわらず、それを懐かしく思い、見果てぬ夢を追い求めるところがある。神話世界の喪失について、「私にはどうにもできない」のだが「どうか戻ってきてくれ」と願い続け、身体を通してそのことを表現しようと苦闘するプロセスを重視するのである。それが〈キツネに騙される力〉を取り戻していく道だと、私は提案したい。

第四に、〈キツネに騙される力〉を取り戻す道を拓いてくれるのはアートの力関わっている。〈生命世界との繋がりと喪失〉は、科学知識やデータなどのエビデンスに基づかない、一回限りの主観的な経験である。個別具体的であり、その人の固有の経験となる。こうした経験に形を与え、他者の感受できる表現物として提示するのが、文学作品や芸術作品の力である。ただし、作品の受け取り手がアートを感受するための感受性を養わなければ、目の前にある作品は「わけのわからないもの」「難しいもの」としてしか現れない。たとえば、石牟礼道子の文学作品は一部のファンや文学者の中では熱狂的な人気を誇り、高く評価されているが、多くの人にとっては読みにくく、敷居が高いものである。私自身、石牟礼の作品を「スラスラ読む」というのは不可能であり、そこで描かれている多くのものは、内実を掴むための努力が必要である。なぜならば、石牟礼の描く〈水俣〉の〈生命世界との繋がりと喪失〉は、石牟礼の固有の経験であり、他者である〈私〉とは隔絶されているからである。固有の経験は、他者と簡単に共有できるわけではない。私と石牟礼は深い断崖で分け隔てられている。しかしながら、たとえば私の場合、吉永の朗読した「アコウの蟹の子」は、ほかの作品に比べると、ずっと自分のなかに入ってくる。なぜなら、私は埋立地を歩いたこともあるし、吉永宅を訪問して話を聞いたことがあり、二人がどんなふうポリバケツをぶら下げて石牟礼を見舞ったのか、具体性を持って想像することができるからである。そこまで具体的な想像ができるということは、断崖の向こうにある、石牟礼の描き出す固有の経験世界にジャンプして飛び込んでいくための、スプリングボードがあることを意味する。つまり、私がここでいうアートに対する感受性とは、芸術や文学の知識や才能とは異なり、〈水俣〉で積み重ねられた体験によって得られるものである。すなわち、アートを表現する側だけではなく、アートを感受する側にも〈キツネに騙される力〉を取り戻す稽古が必要となる。その地を歩き、人々に出会い、死者たちの声に

耳を傾けるなかで、アートの世界が拓かれ、〈生命世界との繋がりと喪失〉が感受されるようになるのである。

以上のように考察してきたが、これらは実際の朗読活動の担い手たちの取り組みと重なるものであるのかについての、実証がほとんど行われていない。そこで私は現在、朗読活動の担い手へのインタビュー調査を行なっている。今後は、かれらの実際の証言に基づきながら、朗読活動のなかには〈キツネに騙される力〉を取り戻すという一面があることを明らかにしていきたい。

おわりに

私は〈キツネに騙される力〉を取り戻すことを、将来の環境破壊を防ぐための環境教育として考えたい。そのときに鍵になるのは、〈知識の習得〉ではなく〈体験の積み重ね〉を中心にした学びである。これまでも〈水俣〉では環境教育における体験が重要であることが指摘されてきた。たとえば、環境教育を研究する降旗信一は、水俣自然学校の設立・運営の中心いた小里アリサの活動を取り上げている。小里は1989年に水俣病センター相思社の職員になり、〈水俣〉で環境教育活動に力を入れた。降旗によれば、小里は建物のなかで水俣病について子どもたちに教える活動に限界を感じていたが、〈水俣〉の集落を歩くプログラムでは子どもたちが生き生きとしてくるのに気づいた。降旗は、小里が海岸で子どもたちと石切をしたり、生き物探しをしたりしているときに得た経験を以下のようにまとめている。

ある日、そんな時間に、「水俣病が起こる前もこういう海岸でみんな食べ物をとって、それを食べて暮らしていたんだよね」と話をしたところ、「あっ、だから魚に毒が入ったら大変なことになったんだね。」と子どもが驚くほど反応良く理解を示した⁶⁰。

以上のように、子どもたちはまさに〈水俣〉の地を歩き、そこで体験を重ねるなかで、水俣病への理解をぐっと深くしていったのである。私の考える環境教育はこうした小里らの〈水俣〉での教育活動の系譜にある。他方、小里はネイチャーゲームに関心をいだき、自然体験プログラムを水俣で実施していく。ここで重視されるのはあくまでも「自然」の体験であり、見えるもの、触れるものが学習の対象になっている。降旗によれば、小里とともに〈水俣〉で活動していた三村堅一も「五感をみがこう！ おどろきのせんすづくり＝袋探検隊」と題した野外学習会を実施している。ここで対象とされているのはあくまでも、

⁶⁰ 降旗(2015)、20頁。

視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚であり、自然科学で感知できる自然的存在である。つまり、第六感で捉えられる超自然的な存在は外されていた。そのため、〈水俣〉の神話世界は小里らの体験型自然学習の対象にはなっていないのである。私が〈キツネに騙される力〉を取り戻す環境教育で主眼を置くのが、この第六感である。「目にはみえないもの」に神経を研ぎ澄まし、私たちが包まれている生命の世界との繋がりを感じようとする。つまり、第六感とは、科学では理解できない不思議な世界に飛び込む能力である。注意しなければならないのは、このときの第六感はいわゆる「超能力」のように才能があったり、厳しい修行を積んだりして身につけた特殊な能力ではなく、地域の生活のなかにある（あった）ありふれた能力である、ということである。

そして、付け加えておきたいのは、私は超自然的な存在を実証したいわけでも、実体化して価値づけたいわけでもないことである。神話世界の存在たちは、いるかもしれないし、いないかもしれない。そうしたものが、存在するための余白をこの世界に作りたいと考えている。人間は科学の発展によって、実在するもので世界を埋め、理解し尽くそうとしている。そのなかで「わからないもの」「不思議なもの」をそのまま受け入れることができるのが、〈キツネに騙される力〉である。〈キツネに騙される力〉を取り戻したとしても、他人に自慢したり、優越感を抱いたりすることはできない。キツネに騙されるというのは、ちょっと恥ずかしい失敗談なのである。みんなに「キツネに騙されたんだよね」と言っても、周りにアハハと笑われて終わってしまう。そうした、それ自体には価値がないような不思議な経験こそが、「〈私〉はもっと大きな生命世界に包まれ、受け入れられている」という、根源的な存在の安心感を生み出すのではないだろうか。この安心感とは、私たちは無力で、受動的に自然というものを受け入れるしかなく、自己というものは超自然的な存在に圧倒されてしまうような儂い存在であり、〈生かされている〉のだという感覚である。その感覚は、絶対神や原生林（ウィルダネス）といった人間とかけ離れた存在が占有するものではなく、生活のなかで〈キツネに騙される〉という日常的できさやかな経験からももたらされるのではないかと私は考えている。そのため、今後の研究でも、人々の日常にある小さな経験に目を向けていくことが、これからの環境破壊を防止する道筋になっていくことを明らかにしていきたい。

*本研究は、特別研究員奨励費（課題番号 20J0009）の支援を受けたものである。

参考文献

- 朝岡幸彦「ESD と共生社会の教育—〈持続可能性〉と〈多様性〉の教育—」尾関周二・矢口芳生監修、亀山純生・木村光伸編『共生社会 I—共生社会とは何か』農林統計出版、2016年、103-118頁。
- 石牟礼道子・丸木俊・丸木位里『みなまた 海のこえ』小峰書店、1982年。
- 石牟礼道子『石牟礼道子全集 不知火』第二巻、2004年。
- 石牟礼道子『石牟礼道子』（日本文学全集池澤夏樹編、24）河出書房新社、2015年。
- 石牟礼道子『魂の秘境から』朝日新聞出版、2018年。
- 色川大吉編『水俣の啓示』上下、筑摩書房、1983年。
- 内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』講談社現代新書、2017年。
- 大塚直『環境法』第二版、有斐閣、2007年。
- 岡本達明・松崎次夫『聞書水俣民衆史』第一巻草風館、1990年。
- 奥正光「石牟礼作品で語り継ぐ水俣病 朗読会『続けるのが大事』朝日新聞、2018年2月18日。
- 川尻剛士「水俣病を語り継ぐ朗読活動」『環境と教育』第50号、第3巻、2021年、40-41頁。
- NHK 戦争証言アーカイブス「40年間隠し続けた肉親の水俣病」『後史証言プロジェクト 日本人は何をめざしてきたのか 2013年度「地方から見た戦後 第2回水俣 戦後復興から公害へ」』、2013年。
https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/postwar/shogen/movie.cgi?das_id=D0001810033_00000（2021年3月1日確認）
- 熊本県（水俣病審査課・水俣病保険課）「水俣病関連統計」2020年8月31日。
- 小松原織香「水俣の祈りと赦し：1990年代の「もやい直し」事業を再検討する」『現代生命哲学研究』第5号、2016年、51-73頁。
- 小松原織香「〈被害者の情念〉から〈被害者の表現〉へ—水俣病「一株運動」（1970年）における被害者・加害者対話を検討する」『現代生命哲学研究』第8号、2019年、57-129頁。
- 笹岡正俊「環境ガバナンスの「進展」による民俗知の無力化：インドネシア共和国マルク州とジャンピ州の二つの事例から」『北海道大学文学研究科紀要』第156号、2019年、75-119頁。
- 降旗信一「公害教育における自然体験学習—水俣公害教育史における自然体験学習の成立期を探る—」『環境教育』第25号、第2巻、2015年、16-27頁。

水俣市史編さん委員会編『新水俣市史』民族・人物編、水俣市、1997年。

水俣病資料館「吉永理巳子さん」『語り部紹介』（掲載日不明）

https://minamata195651.jp/pdf/kataribe11_yoshinaga.r.pdf（2021年3月1日確認）